

2020 年度 研究助成金贈呈式

コロナウィルス感染拡大防止のため
予定していた研究助成金贈呈式は
中止になりました

2020 年 7 月 16 日(木)

渋谷エクセルホテル東急

公益財団法人東急財団
The Tokyu Foundation

式 次 第

1. 贈 呈 式

11 : 30 ~ 12 : 00

- 挨 拶
- 総 評
- 研究助成金決定通知書授与

- 来賓挨拶

- 研究助成金受領者 代表挨拶
学術研究
一般研究

2. 懇 親 会

12 : 00 ~ 13 : 00

- 乾 杯



南 佳典

玉川大学 農学部 教授

- 研究期間：2年
- 助成金額：405,344円

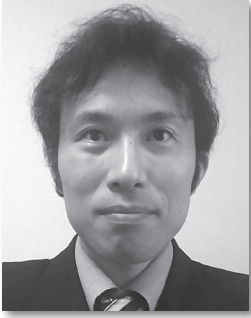
研究課題

多摩川河川敷におけるテントウムシ類の季節的動態およびエサ資源生物の分布とそれらに関わる緑地の重要性

都市近郊における野生生物の生息環境は減少しつつあり、外来種の侵入リスクが高くなっている。緑地は生物が餌資源を確保するために重要で、とくに河川敷の緑地は非常に多様性が高く、河川敷の緑地を保全することは今回対象とするテントウムシの多様性を保つことにつながる。今回の研究では、テントウムシの環境適応性や、外来種と在来種の相互作用を検討することを目的とする。

多摩川河川敷に分布する緑地に調査区を設定し、1ヵ月に1回程度の頻度でスウィーピング法によってテントウムシを捕獲する。また同時に捕獲されるアブラムシ類を記録する。周辺の森林や生産緑地などにおいても同様な調査を行う。得られたテントウムシ類から外来種と在来種を選び飼育試験を行う。

期待される結果は、テントウムシ類の多様性、外来種の存在と在来種との競合、植物組成の変化に伴うテントウムシ類の変化、などである。テントウムシ類における知見は少なく、上述の情報は重要である。また、議論の中で「生物多様性の維持と防災」とのバランスをどうとるかについても言及する。



寺原 猛

東京海洋大学
海洋生物資源学部門 助教

- 研究期間：2年
- 助成金額：610,000円

研究課題

多摩川河口域の微生物資源、希少放線菌の多様性保全および新種の分離に向けた取り組み

放線菌は生理活性物質の主要な生産菌であることが知られている。土壌などの環境試料から、放線菌を非選択的な方法で分離すると、*Streptomyces* 属が優占的に分離されることが一般的である。そのため、希少放線菌 (*non-Streptomyces* 属) の分離には、何らかの選択的分離法を必要とすることが多い。多摩川をはじめとする東京湾に流入する河川の河口域の底泥から、種々の分離法によって希少放線菌に関する研究も報告されているが、どのような希少放線菌がどのくらい存在するのかは調べられていない。

本研究では、多摩川の河口域などで堆積物を採取し、多摩川河口域における希少放線菌の多様性を調べるとともに、それらを保全・活用するために希少放線菌の新種の分離に向けた取り組みを行う。

これにより、多摩川河口域の微生物資源、希少放線菌の多様性や分離に関して、新たな基礎的知見が得られるとともに、多摩川の河口域も含めた生態系の豊かさ・重要性について改めて認識されることが期待される。



柳川 亜季

明星大学 理工学部 助教

- 研究期間：1 年
- 助成金額：631,379 円

研究課題

2019-2020年の調査を通じた台風19号による多摩川の礫河原再生が河川敷の粒径組成、植生、陸生の昆虫に及ぼした影響評価

研究の目的は、多摩川の大規模出水による礫河原の形成が、河川敷の植物群落の在来種の比率にどのように変化するか、それによって、河川敷の陸生昆虫などに変化があるのか検証することである。

都市河川の河川敷の多くには外来植物が繁茂し、景観の維持管理が課題となっている。これは人為的な水位管理による礫河原の消失に一つの原因があるとされる。そこで、本研究では、2019年の台風19号による礫河原の形成により、河川敷の植生や昆虫数がどの程度変化するかを2020年に調査し、2019年に取得した生態調査データと比較し、明らかにする。そして、大規模な出水により形成された礫河原は景観回復の場となるのか、植生群落構造から検証する。

気候変動により、河川の水位の上昇が各地で予測されているが、本研究の成果は、外来種の繁茂する河川敷の景観が今後、従来の礫河原に回復する可能性や、そのプロセスを示すことができる、大変重要なものであると考える。公表の方法は、生態学会の全国大会での発表および、論文投稿を予定している。



甲斐 貴光

明治大学 黒川農場
特任講師

- 研究期間：1年
- 助成金額：2,000,000円

研究課題

環境保全型農法による土壌微生物群集が多摩川梨の品質と収量に与える土壌の好条件の解明

ナシ栽培は病害虫防除のため、化学肥料や化学合成農薬が利用されている。化学肥料の投入は、作物成長に必要な栄養分のみを土壌中に補給することができ、しかも化学肥料の多くは、水に溶けやすく速効性があるため、効果的な土壌への栄養供給が可能である。そのため、農地の単位あたりの収量を大幅に増大させる等、一定の成果がもたらされている。しかしながらその反面、化学肥料の使用は過剰投与になりやすく、土壌団粒の減少、地下水汚染、土壌微生物の減少といった自然環境や生態系の破壊等の問題を引き起こしている。本研究の目的は、ナシ栽培において、環境保全型農法により高品質と高収量を維持し、持続可能な循環型農業を実現するために、土壌微生物群集が多摩川梨の品質と収量に与える土壌の好条件を解明することである。

本研究では、多摩川梨と総称される地域のナシ園を調査し、環境保全型農法と慣行農法の土壌肥沃度を比較検討する。これらの研究成果については、市役所のホームページや広報誌に情報発信し、市民に持続可能な環境保全型農業の重要性を啓発する。



山崎 久登

東京都立砂川高等学校
通信制課程・教諭

- 研究期間：2年
- 助成金額：51,780円

研究課題

江戸時代多摩川の生態系と鷹場

本研究は、江戸時代の多摩川流域を対象とし、鷹場が地域環境や生態系にどのような影響を与えていたのかを分析するものである。鷹場とは、本来は「鷹狩りを行う場」を意味するが、江戸時代の鷹場には河川や野山・さらに村までも含まれる。これは鷹狩りの獲物を確保するために、広い領域で環境保全（魚・鳥殺生禁止など）を行う必要があったからだ。多摩川流域は、徳川將軍家や尾張藩の鷹場、さらに幕府の鷹の訓練場などに指定されていたのである。こうした鷹場と地域環境の関係を考えることが現在の近世史研究の課題となっている。

本研究では、農民の日記や諸記録（御用留など）を分析することにより、①江戸時代前期から後期にかけて多摩川流域において生態系がどのように変化をしているのか、②その中で鷹場が環境因子としてどう作用していたのかを分析する。

本研究の成果は、近世史研究だけでなく、現在の多摩川の生態系を考えていく上でも有効なデータを提供できるものと考えている。最終年度に研究報告会を実施し、広くその成果を還元していきたい。



中島 保寿

東京都市大学
知識工学部自然科学科
准教授

- 研究期間：2年
- 助成金額：1,992,500円

研究課題

レーザースキャナを用いた多摩川流域上総層群化石群の3次元構造データ保存法の確立

多摩川河床には、約300万年前～約120万年前の地層「上総層群」が露出しており、動物化石や足跡化石の密集産状は当時の環境や生物相を理解する上で重要な研究対象となっている。しかし上総層群の岩質は軟弱で、夏期の増水などによって化石産状は容易に失われてしまうという難題を抱えている。

そこで本研究では2年の研究期間のうち冬季の減水時に多摩川河床に露出する化石密集層の産状を建築用の3Dレーザースキャナを使用して広域でデータ採取を行ない、3次元構築を試みる。これにより、化石密集層の立体的分布および風化侵食の過程を明らかにする。

この化石層の3次元データおよび、標本・露頭レベルで解析が行われてきた化石研究の成果を統合することで、古生態系の変遷を4次元的に理解することが出来る。これらの成果は、地層立体断面モデルとして3D出力し、東京都市大学夢キャンパスにおいて展示解説を行うことで、一般市民に向けた教育普及に役立てる。



酒井 一成

北里大学 大村智記念研究所
微生物応用科学研究室
特別研究員

- 研究期間：2年
- 助成金額：1,500,000円

研究課題

多摩川流域に生息する水生植物から分離した糸状菌を用いた抗冷水病活性物質の探索

アユの感染症の一種である冷水病原因菌の *Flavobacterium psychrophilum* に対して効果を示す化合物を多摩川流域に生息する水生植物から分離した微生物を用いて探索する研究を計画した。本研究目的を達成するために検定菌に対しての抗菌活性化合物の探索例は存在せず、検定菌の評価系の構築を行い、水生植物から糸状菌を分離している例がごくわずかであるため糸状菌分離の検討から始めることとした。

多摩川流域に生育しているホザキノスサモなどの水生植物から糸状菌を分離し、斜面培地で保存する。順次培養抽出物を作成する。構築した *F. psychrophilum* に対する抗菌プレートを作成し、ペーパーディスク法を用いて抗菌活性評価を行う。抗菌活性を示した糸状菌培養液から抗菌活性を指標に化合物の精製を行う。

本研究を日本農芸化学会や菌学会をはじめとする学会で発表し、国際学術誌に投稿をすることで広く本研究を公表することが可能であると考えている。また本研究では化合物精製を行う前に藻類に対して急性毒性評価を行うことで環境に対しても配慮した水産用医薬品の開発ができると考えている。



佐藤 友香

東京医科歯科大学 大学院医
歯学総合研究科 医歯学系専攻
環境社会医歯学講座 医療政策
情報学分野 博士課程

- 研究期間：2年
- 助成金額：856,580円

研究課題

河川攪乱後に出現する先駆種の標本所蔵
体制の強化に関する研究
—実施プロセスにおける教育的効果の
検討もふまえて—

2019年台風19号で広域に攪乱された多摩川流域を対象に、限られた期間のみ出現するような生物種の標本記録を得ることを目的とする。速やかな調査着手が必要であり、半永久的な記録となる生物標本の採集から収蔵に十分つなげられていない課題がある。また、各博物館における標本収集の意向も、多くの場合は公知ではない。災害の多い我が国においては、同一地域のみならず多拠点での標本所蔵体制を取ることも重要であると考えられるため、その実現可能性も併せて検討したい。

方法として、①多摩川流域で攪乱後1～2年以内にみられた生物種のうち、特に植物と昆虫について上・中・下流域ごとに標本を作製して同定する。②当該種の自然史博物館などにおける標本所蔵状況と収集意向をヒアリングにより明らかにする。

研究終了後は、作製した生物標本の寄贈により、多摩川流域で産した標本の所蔵点数を広域的な観点で増加させる。日本全体として多拠点での標本所蔵体制づくりを目指し、基礎的な情報を各館の状況に配慮した上で集約し、学会発表や目録などで公知とする。



渡邊雄二郎

法政大学 生命科学部 教授

- 研究期間：2年
- 助成金額：350,000円

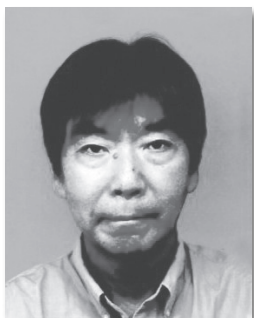
研究課題

多摩川流域中の窒素・りんの定点分析と植物肥料としての有効利用技術の開発

栄養塩類である窒素とりんは、生活排水や肥料の過剰施肥などにより河川中に流入し、湖沼等閉鎖性水域の富栄養化を引き起こす。そのため、河川中での窒素とりんの挙動を把握すると共に、回収して有効利用する技術が求められる。また開放系である河川は、閉鎖性水域と比較して滞留時間が短く、流量や流速の変動が大きいいため、的確に原因を把握するためには継続的な分析調査が必要とされる。

本研究では、月に1回程度の多摩川の窒素とりんの全流域定点調査を行い、窒素とりんの多い地点を環境基準値と比較すると共に、それらの化学形態を把握し、汚染原因を究明する。また多摩川水をゼオライト等吸着材培地に通水して窒素とりんの除去能を評価する。

本研究により、多摩川流域の汚染状況を推定でき、また吸着材培地と植物による自然を模擬した新しい浄化法を確立することができる。得られた成果は、学術誌への投稿、学会発表及び大学ホームページで広く発信するとともに、一般展示会において積極的にアピールする。また小・中学生向けのイベント教材としても利用する。



伊藤 教行

特定非営利活動法人 R.I.La
理事 主任研究員

- 研究期間：2年
- 助成金額：628,140円

研究課題

魚類(オイカワなど)をマーカーとした水再処理センターの排水の影響を受けない多摩川中上流域におけるマイクロプラスチック汚染調査

水再処理センターを有する大規模河川におけるマイクロプラスチック汚染の原因については、水再処理センターから流入する一次マイクロプラスチックであることが推測されていたが、昨年度実施した調査から、多摩川中流域に存在する水再処理センター以降の下流域で採取された検体のオイカワからは、90%以上の確率でマイクロプラスチックが検出され、その汚染の深刻な状況が浮き彫りとなった。そこで本年は水再処理センターの排水の影響を受けず、2019年に調査を実施したエリアよりもさらに上流域において、オイカワなど多摩川で繁殖し、生息している魚類をマーカーとして、昨年度と同様の手法によりこれら検体のマイクロプラスチック汚染調査を実施し、2019年に実施したエリアの調査結果と比較検討を実施することによって、多摩川におけるマイクロプラスチック汚染の全容を解明していくことを目的とする。調査結果は速報値をSNS等で開示すると共に多摩川流域市民学会をはじめ、関連団体のシンポジウムなどで開示していく。この調査により多摩川並びに多摩川が流入する東京湾のマイクロプラスチック汚染防止につながることを期待する。



苗川 博史

東京農業大学 客員教授

- 研究期間：2年
- 助成金額：250,000円

研究課題

コシアカツバメ (*Hirundo daurica*) が多摩川河川敷に分散・拡大した動向と現状を通して多摩川中・下流域の環境および都市化と農耕地の変遷を探る

本研究は、1940年代に神奈川県西部から進出したコシアカツバメが、県央地域もしくは県南地域のルートを経て多摩川流域に分散・拡大した動向と現状を通して、コシアカツバメの多摩川・河川敷利用ならびに多摩川中・下流域環境および都市化と農耕地の変遷を、現地調査と先行研究および地理情報等をもとに、考察することを目的に実施する。

現地調査は、川崎市北部の多摩区・矢野口周辺から南部の川崎区・小島新田周辺に至る約28kmの多摩川流域の河川敷を踏査しながら、コシアカツバメの視認調査を行う。また、神奈川県下のコシアカツバメの初認日および終認日、視認月日・場所・羽数・行動、巣が継続して建造物に残されているかの有無を調査、また県民からの情報を募り、動向と分布を地図上にプロットしていく。

調査から得られた情報・知見をもとに、1940年代以降のコシアカツバメが多摩川流域に進出してきた動向と生息・分散の移り変わりについて、多摩川流域の土地環境の変遷を確かめ、都市化と農耕地との関連を整理していく。



柴田 隆行

多摩川の自然を守る会 代表

- 研究期間：2年
- 助成金額：237,000円

研究課題

台風19号による大增水で全滅した多摩川の河原植物が自然再生するかについての調査・研究

多摩川の河原植物の生育状況について全域悉皆調査を行っているが、2019年10月の台風19号による多摩川大增水で礫河原に生える河原植物はほとんどが流失した。だが過去にもこれに匹敵する大增水が何度かあったが河原植物は自然再生しているので、今後の復活を期待しつつ河原植物の生態を明らかにしたい。

河原植物分布域を中心に悉皆調査を行う。推定値ではなく全個体数を目視で数え、具体的な分布地図を作成する。

調査結果はすべて河川管理者および東京都建設局等に提供し、河川工事の際の環境留意事項として活かされている。数値はホームページや会報で公開するが、稀少種保護のため詳細な分布図等は限定公開とせざるを得ない。



井上 太志

自然観察活動チーム
Wild Lives Watchers 代表

- 研究期間：2年
- 助成金額：298,508円

研究課題

多摩川水系における希少性コウモリ類の生息を探る

多摩川支流である三沢川では、20kHz帯の音声を発するヒナコウモリ、ヤマコウモリ等の絶滅危惧種に指定されているコウモリ類（東京都、神奈川県、環境省）の音声が確認されている。本調査研究では、これらの希少コウモリ類の生息状況を把握するとともに、生息情報を地域自然史として後世に残し、今後の多摩川のコウモリ類に関する啓蒙活動のための基礎情報収集を目的とする。

多摩川支流の三沢川において、録音機器等を用いて、飛来するコウモリ類の音声を取得し飛来状況を記録する。また、記録した音声を精細に分析し、生息する種の推定を行う。

三沢川沿いにねぐら等の存在が想定されることで、今後周辺環境において改変が起こる際、保全の観点からの対応策を提案するための重要な知見となると考えられる。また、東京都や神奈川県をはじめとしたコウモリ類の生息基礎情報としてデータの蓄積及び運用が可能である。

本研究結果は、川崎宙と緑の博物館等に学術論文として投稿することを想定している。



角田 清美

青梅市教育委員会
青梅市文化財保護指導員

- 研究期間：1年
- 助成金額：274,267円

研究課題

浅川流域の陸水学的研究

浅川の流域面積は約156km²で、多摩川流域（約1,240km²）の約13%を占める。多摩川流域は広大で、これまでに地質・地形・河川・地名を主な内容とする、統一的な調査・研究は行われていなかったため、申請者はこれまでに、財団の援助を受け、秋川流域（1983年度）、小河内ダム上流側（1984年度）、ダムから玉川上水羽村取水堰まで（1987年度）、日原川流域（1988年度）に分割して、調査を実施した。今年度は浅川流域において、従来の調査項目に水質を加え、調査を実施する。

調査・研究は、現地調査を中心とする。室内では地形図の読図と収集した各種資料を整理する。調査結果は地質図や、支流流域を単位とした水系図などの主題図を作成する。

今回の調査によって、多摩川流域の上・中流域に位置する多摩地方の、地質・地形（稜線の配列と特徴・地名・渓谷・鍾乳洞など）・河川網と流域の特徴・温泉・山地内の地名などの知識が統一的に得られることになる。



渡辺 仁

特定非営利活動法人
東京生物多様性センター
代表理事

- 研究期間：2年
- 助成金額：550,000円

研究課題

令和元年10月台風第19号による攪乱後の多摩川水系における鳥類の生息状況及び生態の変化に関する調査研究

令和元年台風19号により、多摩川の各地では氾濫被害が出るなど、大きな攪乱が生じた。多摩川は、今まで樹林化や礫河原・草地の減少など、本来の河川性の生物の生息・生育環境が減少してしまう課題があった。本研究では河川性の鳥類に着目し、台風19号の前後で、河川性鳥類の生息状況がどう変化したかを把握し、河川生態系がどう変化したかを明らかにする事を目的とする。

多摩川の河川区域内を対象に、上中下流の代表的な区間において、河川環境に依存する鳥類の分布及び環境の状況を現地調査により把握する。現地調査結果と既往調査結果を比較検討し、台風19号前後の河川性鳥類の生息状況及び生息環境の変化を分析する。

研究結果については、多摩川の基礎情報として蓄積されるとともに、河川環境保全・管理のために河川管理者等へ提言を行い、生物多様性保全への還元・活用を図るものとする。また、成果については、リーフレット等により、関連機関・公共図書館等へ配布する。また、ネットを活用し、広く一般に進捗や成果を公開する予定である。



太刀掛脩平

東京大学大学院農学生命科学研究科森林科学専攻森林動物学研究室修士課程

- 研究期間：2年
- 助成金額：671,550円

研究課題

多摩川上流域のリター堆積における食物網構造とその決定要因の解明

森林溪流では、落葉季になると河床構造の違いによって様々な大きさや形のリター堆積(リターパッチ)が形成される。そして、リターパッチは森林溪流の底生動物群集の食物と住み場所になっている。底生動物は、河川生態系の中で基礎エネルギー資源と魚類などの上位捕食者をつなぐ栄養段階を占めるとともに、物質循環の上でも重要な役割を果たしている。多摩川水系ではそれらの分布に関する研究が多く実施されているが、食物網構造に関する研究は乏しい。従って、本研究では多摩川水系上流部のリターパッチにおける底生動物群集の食物網構造とその決定要因を解明する。

食物網構造を解明するために、秋川支流の矢沢と小坂志川から得たサンプルの安定同位体比を測定する。また、栄養塩濃度や水温条件を変えた飼育実験によって食物連鎖の長さを決定する要因を明らかにする。

これにより、希少底生動物保全に必要な環境整備、富栄養化や温暖化などの環境変動への群集の応答予測、魚類などの河川から得られる資源の持続的利用を行う上で重要な知見をもたらすことが期待できる。



岸本 慧大

慶應義塾大学大学院
政策・メディア研究科修士課程

- 研究期間：2年
- 助成金額：500,000円

研究課題

都市農業評価のための食料・水・エネルギーネクサスマデリング——多摩川流域を対象として

都市農業は、多面的機能の活用に向けて保全と振興が進められる一方、農薬や水資源の利用による環境負荷への懸念がある。既往研究では、多面的機能と環境負荷のトレードオフやシナジーは、複合的指標や空間的特性の観点からは定量的に評価されていない。本研究は、このトレードオフ・シナジーを食料・水・エネルギーの連関によって可視化するとともに、都市農業の実態を地域特性、都市化、歴史的変遷の観点から明らかにすることが目的である。

多摩川流域あるいは東京大都市圏を対象地域として、地域ごとの食料・水・エネルギーについて、灌漑、農薬、園芸栽培などにおけるインプット、農業生産、地下水浸透、残渣などにおけるアウトプットを算出し、多面的機能や環境負荷への影響を可視化する。また、多様な地域や時代に応用し、文化、地形、都市化、社会情勢との結びつきを可視化する。

このように地域ごとや歴史的に可視化されたトレードオフやシナジーは、都市農業の社会生態学的な位置づけの指標であり、地域の状況に応じた都市農業の保全や振興の方針のためのヒントとなる。



亀田 豊

千葉工業大学創造工学部 准教授

- 研究期間：2年
- 助成金額：1,000,000円

研究
課題

多摩川流域における水中微細マイクロプラスチック存在調査とシミュレーションモデルを用いた流域内挙動解析



新谷 政己

静岡大学工学部 准教授

- 研究期間：2年
- 助成金額：1,000,000円

研究
課題

巨大都市を流れる多摩川流域で薬剤耐性遺伝子を伝播しうるプラスミドの同定とその伝播経路の解明



佐々 悠木子

東京農工大学農学研究院 講師

- 研究期間：2年
- 助成金額：1,300,000円

研究
課題

多摩川の流域周辺に生息するワカケホンセイインコ (*Psittacula krameri manillensis*) など、野生化した飼い鳥から人に感染する病原体の調査



吉川 朋子

玉川大学農学部 生産農学科 教授

- 研究期間：2年
- 助成金額：192,288円

研究
課題

多摩川流域のドジョウ類の分布と生息環境、及びヒガシシマドジョウの河川内での季節移動と環境利用



田中 正明

四日市大学生物学研究所 所長

- 研究期間：2年
- 助成金額：163,480円

研究
課題

多摩川上流域に侵住した大型珪藻外来種の生息状況とその対策に関する研究



大貫 敏彦

東京工業大学 先端原子力研究所 教授

- 研究期間：2年
- 助成金額：799,000円

研究
課題

多摩川水系におけるセミの抜け殻を利用した元素分布の広域調査



寺田 昭彦

東京農工大学大学院工学研究院 教授

- 研究期間：2年
- 助成金額：1,000,000円

研究
課題

多摩川底質の亜酸化窒素消費ポテンシャルの体系的評価：排水処理施設からの放流水の影響



土肥 真人

一般財団法人エコロジカル・デモクラシー財団
代表理事

- 研究期間：2年
- 助成金額：1,307,000円

研究
課題

水の循環と子どもの遊びからみる自然と社会とのつながりとその価値について
—多摩川流域の自然環境保全に向けた
流域連携の可能性に向けて—



二瓶 泰雄

東京理科大学理工学部土木工学科 教授

- 研究期間：2年
- 助成金額：2,000,000円

研究
課題

多摩川におけるマイクロプラスチック汚染状況と魚類への影響



吉永 龍起

北里大学海洋生命科学部 准教授

- 研究期間：2年
- 助成金額：1,000,000円

研究
課題

多摩川の遺伝資源：固有の魚類個体群とその生態

継続 一般研究 助成金受領者



蓮尾 純子

多摩川鳥類カウントグループ 会長

- 研究期間：2年
- 助成金額：326,000円

研究
課題

多摩川鳥類カウント再現



久保田 繁男

特定非営利活動法人
横沢入里山管理市民協議会 理事長

- 研究期間：2年
- 助成金額：134,872円

研究
課題

プラスチック製産卵誘致容器の活用によるトンボ類の保護・増殖

今年度の 助成金 合計額 22,029,688円

選考委員



委員長

田畑 貞壽

公益財団法人日本自然保護協会 顧問
千葉大学 名誉教授



池田 駿介

東京工業大学 名誉教授
株式会社建設技術研究所 研究顧問



奥山 文弥

東京海洋大学 客員教授



小堀 洋美

東京都市大学 特別教授
一般社団法人生物多様性アカデミー
代表理事



小宮 輝之

上野動物園 元園長



近藤 昭彦

千葉大学環境リモートセンシング
研究センター 教授



齋藤 潮

東京工業大学 環境・社会理工学院
教授



鈴木 信夫

千葉大学 名誉教授



土屋 十圀

前橋工科大学 名誉教授



寺西 俊一

帝京大学 経済学部教授
一橋大学 名誉教授



公益財団法人

東急財団

URL <https://foundation.tokyu.co.jp>